

# 「国境なき医師団」への連携と支援のあり方

民間医療・人道支援を使命とする国際的な非営利団体「国境なき医師団」についての説明会を開催した。1999年には長年の活動が認められ、ノーベル平和賞を受賞したその活動への連携・支援のあり方を考える機会とした。

## 国境なき医師団 その信念と活動

国境なき医師団 (MSF) 日本会長  
加藤 寛幸 氏



「国境なき医師団」(Médecins Sans Frontières=MSF)は、1971年にフランスで設立された。国際人道援助と証言活動を柱に活動しており、現在、日本を含む世界28カ国に事務局がある。それぞれが独立して活動を行うためにあえて本部は置かず、世界5グループに分かれて連携しつつ活動を展開している。

世界各地に紛争やテロの脅威が拡散する中で、MSFに対するニーズも高まっており、2015年度には世界69カ国で446のプロジェクトを実施した。活動地域はアフリカが57%、アジアが18%などとなっている。

MSFの収入の92%が個人や民間の支援であり、活動の独立性を保つために政府等からの公的支援は極力抑えている。また、医療関係者以外にも、車両、工事、建築、人事、財務など幅広いスタッフが活動に従事している。

私たちは厳しい状況下で活動している。例えば、内戦状態にある南スーダンでは、治療の必要がある多くの患者が存在するにもかかわらず、病院が破壊され医師も不足していた。そこでMSFは移動診療チームを派遣するなどの活

動を展開し、医療・人道援助を提供している。

また、昨年10月にはアフガニスタンでMSFが運営する病院が爆撃され、14人のスタッフと28人の患者や家族が死亡した。シリアやイエメンでもMSFの病院が爆撃されている。それでも私たちは、政府側・反政府側を含むあらゆる勢力との対話を通して、安全確保に努めながら活動を続けている。世界の人々の切実なニーズに応えるために、皆さまのご支援をお願いしたい。

## 人道・医療援助、挑戦と課題 ～医療アクセスのない人々に たどり着くために～

国境なき医師団 (MSF) 日本  
ロジスティシャン  
萩原 健氏



MSF憲章には、「人種、宗教、信条、政治的なかかわりを超えて差別することなく援助を提供する」「普遍的な『医の倫理』と人道援助の名のもとに、完全かつ妨げられることのない自由をもって任務を遂行する」「ボランティアは、すべての政治的、経済的、宗教的権力から完全な独立性を保つ」「ボランティアはその任務の危険を認識し、自らに対していかなる補償も求めない」ことなどがうたわれている。これが私たちの活動の理念となっている。

私たちが現場に入ると、まず「医療へのアクセスはあるか？」を問いかけながら活動を始める。「医療から疎外さ

れた人々にいかに医療サービスを提供するか」がMSFの使命だからである。人々を医療から疎外する障害はさまざまである。国境、政府・反政府、紛争、自然環境、治安、経済的理由、国際社会による制裁、文化・風習、政治的要因、法律などだ。そうした中で、MSFは「人道・医療援助はすべての障害と一線を画す普遍的なもの」という理念を貫いている。

私は企業勤務を経て、2008年からMSFの活動に参加した。非医療スタッフとして、現地での活動を統括する責任者を務めている。2011年の南スーダンでは、民兵組織と粘り強く交渉して、医療アクセスのない人々のいる地域にたどり着いた。2013年のエチオピアでは、干ばつの中、厳しい地形のため孤立している村に到達し、栄養失調の人々に食糧援助を行った。2014年には地中海のシリア難民に医療援助を行った。そして2015～16年は、内戦下のリビアの病院をサポートして医療サービスを提供した。

MSFは丸腰で現地に入る。それだけにすべての勢力と対話・交渉しながら、現地の人々の理解を得て安全を確保しなければならない。しかし、残念ながら、その対話・交渉の窓口が狭まってきたと感じる。空爆や医療従事者への攻撃も後を絶たない。それでも、私たちは果敢に挑戦するしかない。対話と交渉を重ねて、人道・医療サービスを提供するMSFの姿勢は不変である。そうした活動に対して、皆さまのご支援をぜひお願いしたい。